

たな
棚

つぐ
次

たつ
辰

きち
吉

ほこ 世界に誇る東かがわ市の手袋産業を育てた人
 てぶくろさんぎょう
そだ



編集・発行 東かがわ市教育委員会
 日本手袋工業組合

世界に誇る東かがわ市の手袋産業を育てた人

たなつぐたつきち
棚次辰吉 1874(明治7)年～1958(昭和33)年

東かがわ市の手袋産業

全国の手袋の約90%が、東かがわ市で作られていることを知っていますか。

東かがわ市は、日本一の「手袋のまち」です。今ではファッション・防寒用だけでなく、プロゴルファーや野球選手などが使うスポーツ用のほか、工業用などさまざまな種類の手袋がつけられ、日本国内はもちろん外国でも販売され、東かがわ市の手袋産業は、世界に誇る産業となっています。

東かがわ市の手袋産業は、1880年代(明治時代の中ごろ)から旧白鳥町を中心にはじまり、今日まで約140年の間受けつがれてきました。この歴史ある東かがわ市の手袋産業を育てたのが、棚次辰吉です。(以下、辰吉)

辰吉とはどんな人物だったのでしょうか。また、どのようにして東かがわ市の手袋産業を育てたのでしょうか。

辰吉の生い立ち

辰吉は、1874(明治7)年、現在の東かがわ市松原(讃岐国大内郡松原村)に生まれました。辰吉の家は貧しく、しかも兄弟がたくさんいたので、みんなが学校へ行くことはなかなかできませんでした。当時の学校は、近所の神主や住職、医者などが、文字の読み書きを教えていたもので、いわゆる寺子屋(注1)といわれるものでした。辰吉が初めて文字を習うことができたのは、10歳の正月からでした。それも学校に行けたのは半年間だけ、その後すぐに奉公(注2)に出されました。当時は、子どもは学校へ行くころになると、他の家に奉公に出て家計を助けるのが当たり前の時代でした。辰吉は、勉強をすることが好きで、どうせ奉公に出るのなら少しでも文字が習えるところへ行きたいと思い、父母に頼んで教蓮寺という近所のお寺に行きました。そして、時間を見つけては本を読みました。

手袋づくりとミシンの開発

1890(明治23)年、辰吉が16歳のころには、日本には西洋の技術や考えが入ってきており、都会では生活が大きく変わっていました。地方にも東京から新聞がくるようになり、都会の様子が変わるやうに伝わってくるようになっていました。例えば、「神戸には汽船がくる。その船は鉄でできているのに沈まない」「家々にはハリガネ(銅線)を伝わって電気というものが送られ、夕方になるとどの家も明るい」「大阪には、鉄ばかりでできた橋が3つもかかっている」などでした。しかし、地方では、夜には行灯やランプ、船は木造が当たり前で、江戸時代とあまり変わらない生活でした。そんなうわさを聞いた辰吉は、ぜひとも都会に出て、近代文明の様子を自分の目で見て、進路を定めたいと思うようになりました。

ちょうどそのころ、千光寺の副住職であり辰吉の従兄弟にあたる両見舜礼(注3)が、妻のタケノとともに大阪で手袋を作る仕事をしていました。辰吉は17歳の時、舜礼に頼んで大阪へ連れてってもらい、手袋づくりを手伝いましたが、まもなくして、舜礼が病気で亡くなってしまいました。辰吉は、舜礼の家を出て、父母を安心させるために必死で働きました。そして、21歳のころなんとか貯金ができ、自分で人を雇い手袋づくりを始めました。

そのころ、日本は中国(当時は清)と戦争(日清戦争)をしていました。この戦争が終わると、日本にはますます海外の考え方や物資が入ってくるようになりました。

そんな折、大阪の町を歩いていた辰吉は、手の甲に3本線の飾りが入った、ドイツで作られた手袋を見つけました。このような手袋を見たことがなく大変驚き、これと同じようなものを作りたいと強く思いました。「自分が使っているミシンを加工すれば作れるのではないか」と思った辰吉は、寝てもさめてもミシンの工夫のことばかり考えました。ご飯を食べることを忘れ、体をこわしそうにもなりました。

当時、辰吉は、「ミシンに歯車は向かない」と思い込んでいました。しかし、ある夜、たくさんの歯車が夢に出てきたのをきっかけに、歯車を使った開発に没頭し、実に約1年3カ月という歳月をかけ、新しいミシンを完成させました。

辰吉は、このミシンの良さを世の中に認めてもらうために、国に特許(注4)を申請することとし、たくさんの書類を書きました。当時は、辰吉が住んでいた大阪から東京へ行くには、汽車で23時間もかかりましたが、辰吉は、東京にある国の役所(特許庁)に一人で行き、他のミシンと違うところを直接説明しました。

1897(明治30)年、辰吉が23歳の時、新しいミシンは「^{けいべんかざり}軽便飾縫機」(のちに新一ミシンと呼ばれる)と名付けられ、ようやく特許を取ることができました。これは、現代であればノーベル賞を受賞することと同じくらい価値があり、世界で認められたことを意味するものでした。このミシンにより、機械で飾り縫いができることとなり、飾りが入った手袋をより多くつくるできるようになりました。



辰吉と「軽便飾縫機」



軽便飾縫機と飾りを施した手袋

手袋会社の設立と海外視察

そのころ、辰吉の故郷の松原村では、それまで盛んだった塩づくりの仕事がなくなり、人々の生活が苦しくなっていました。そんな中、教蓮寺の住職たちから辰吉に、「困っている人を何とかしたい」という相談がありました。そこで、辰吉は、地元の人を雇い、教蓮寺の敷地の中に「^{せんとくかい}積善商会」という会社をつくりました。これが、東かがわ市の手袋産業の始まりと言えるでしょう。

1906(明治39)年、辰吉が32歳の時、手袋産業をより発展させるために、工業が進んでいるアメリカの工場を見てもっと勉強したいと強く思うようになりました。当時、外国に行くために必要なパスポートを取るには、「心身ともに強くなければならないこと」「たくさんのお金を持っていないければならないこと」など、きびしい条件がありました。さらに、アメリカの西海岸へは今のよう飛行機で簡単に行けず、船で太平洋を渡り3週間



「積善商会」の建物風景(教蓮寺境内)

ほどもかかっていました。当時の海外旅行は、今の宇宙旅行と同じくらい大変なことと言えるでしょう。また、辰吉は、英語をまったく話すことができず、自分の名前を書くのがやっとでした。その上、知り合いもない中、たくさんの苦労やトラブルにあいました。しかし、よりよい手袋をつくりたいという強い信念で、たった一人でアメリカ中の工場を見て回りました。さらに4年後には、ドイツやイギリスなどヨーロッパの工場も見まわり、すぐれた技術を日本に持ち帰りました。



棚次辰吉の海外旅券(パスポート)

帰国後は、アメリカやヨーロッパで学んだ進んだ技術を取り入れることで、よりよい設備をつくったり、さらに新しい道具を発明したりしました。このことにより、短時間でたくさんの手袋をつくれるようになり、それまで輸入に大きく頼っていた手袋を日本国内で製造することができるようになりました。辰吉が最初に発明した「^{けいべんかざりぬいき}軽便飾縫機」は、その後もさらに改良され、ハンカチなど手袋以外の製品づくりにも活かされています。

辰吉の想い

やがて辰吉は、大阪に大きな工場を建てるとともに、東かがわ市にも工場を建てました。その後、次々と手袋会社や工場ができ、まちを歩いていると、どこの家からもミシンの音が聞こえてくるほど、たくさんの人が手袋づくりにかかわるようになり、東かがわ市の産業へと育っていきました。そして、いつしか東かがわ市は、「手袋のまち」と呼ばれるようになりました。

辰吉の生涯は、「郷土愛」と「チャレンジ精神」「開拓者魂」に満ちたもので、辰吉の手袋産業への想いは、のちに続く人々にしっかり受け継がれ、今では、東かがわ市は世界でも有数の手袋産地となっています。

【注釈】

(注1) 寺子屋：江戸時代、庶民の子どもに文字や計算を教えたところ。

(注2) 奉公：他の人の家に住みこんで家の手伝いや仕事をする事。

(注3) 両児^{ふたごしゅんれい}葬^{たなつぐねきち}礼：本名は、棚次米吉。東かがわ市の手袋産業のきっかけをつくった人。

(注4) 特許：当時の特許は、新しいアイディアを取り入れ、日本だけではなく世界にも認められなければならなかった。

本紙では、旧引田町・旧白鳥町・旧大内町の自治体名について、合併後の東かがわ市に統一しています。

棚次辰吉の生涯

年代	年齢		その時代にあった主な出来事
1874(明治7)	0	大内郡松原村（現東かがわ市松原）に生まれる。	1874(明治7) 自由民権運動が起こる。
1884(明治17)	10	寺子屋・学校に通う。	1877(明治10) 西南戦争が起こる。
1889(明治22)	15	教蓮寺へ奉公に出る。	1889(明治22) 大日本帝国憲法が公布される。
1891(明治24)	17	両児舜礼に連れられ大阪に出て、手袋製造を習う。舜礼、病死する。	1890(明治23) 第一回帝国議会が開かれる。
1895(明治28)	21	独立して手袋の製造をはじめる。	1894(明治27) 日清戦争が始まる。
1897(明治30)	23	「軽便縫機」の特許を取る。	～1895(明治28)
1899(明治32)	25	教蓮寺内に積善商会を起し、手袋の製造をはじめる。	1904(明治37) 日露戦争が始まる。
1906(明治39)	32	アメリカの手袋工場を視察する。	～1905(明治38)
1910(明治43)	36	アメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどの手袋工場を視察する。	1914(大正3) 第一次世界大戦が始まる。
1916(大正5)	42	大阪手袋株式会社の社長となる。	1918(大正7) 第一次世界大戦が終わる。
1916(大正5)		第一次世界大戦の特需により、東かがわ市～1918(大正7) に手袋会社や工場が次々とつくられる。	1923(大正12) 関東大震災が起こる。
1919(大正8)	45	ヨーロッパを視察する。	1929(昭和4) 第二次世界大戦が始まる。
1932(昭和7)	58	日本産業協会から産業功労者として表彰される。	1941(昭和16) 太平洋戦争が始まる。
1942(昭和17)	68	『棚次体験記』をまとめる。 手袋産業の発展に貢献する。	1945(昭和20) 第二次世界大戦、太平洋戦争が終わる。
1958(昭和33)	84	病死する。	1946(昭和21) 日本国憲法が公布される。
1959(昭和34)		東かがわ市が、世界一の手袋産地となる。	1960(昭和35) 高度経済成長。
1962(昭和37)		日本手袋工業組合ができる。	～1975(昭和50)

【参考図書】※これらの図書は、東かがわ市図書館、香川のてぶくろ資料館にあります。

- ・『棚次体験記』（棚次辰吉述、1942年発行）
- ・『白鳥町史』（白鳥町、1985年発行）
- ・『手袋百年誌』（日本手袋工業組合、1988年発行）
- ・放送大学創立30周年記念 公開シンポジウム報告書
『平賀源内から手袋産業へ ～地域産業の再発見～』（放送大学香川学習センター、2014年発行）

【写真・資料提供】

- ・香川のてぶくろ資料館（日本手袋工業組合）<https://www.glove-museum.com>
- ・橋本康男 香川のてぶくろ資料館 館長



棚次辰吉ゆかりの地めぐり



本地図はおおまかな位置を示したものです。

Q1 辰吉は、^{しゅんれい}舜礼が亡くなった後も独立して手袋の製造を続けますが、その時どんな苦勞が
あったのでしょうか。

A メリヤス手袋(注1)の製造といっても、小規模で家庭の内職も同様に、^{おやかた}親方(注2)のところ
に住まわせてもらい、時には徹夜をすることもありました。それでも1ヵ月の給料は1円20
銭(現在の2万4千円くらい)ほどでした。しかも手袋は冬物ですから春になると仕事がなくな
ります。そこで^{ようがさ}洋傘の仕事にいくことにしました。そうすると親方の家に置いてもらうわけ
にはいかず、近くの家を月に50銭で借りて自炊をしました。その年は大変寒い年で、
朝起きて米を洗う時には氷がはっていることがありました。毎回炊くのはめんどうなので
二日分のご飯を一度に炊いて置いておくと、二日目にはカチカチに凍って食べられないこ
ともあり、やむなく、夜中に帰ってきて食事をせずにそのまま寝てしまうことがよくあり
ました。少ない収入で十分に食べられず、干し大根の煮物、俗にハリハリという副食だけ
の食事^{はんつき}で半月も辛抱したこともありました。寝具といっても一枚の布団にくるまって寝る
のですが、朝まで少しも暖まりませんでした。

Q2 進んだ技術を学ぶために外国に行きましたが、その国の言葉は話せたのでしょうか？ま
た、その時、どんな気持ちで外国に行ったのでしょうか？

A 辰吉は、外国の言葉がまったく話せませんでした。英語は1週間習っただけで、自分の名
前を書くのがやっとでした。とても不安だったと思いますが、その不安な気持ちを上まわ
るだけの学びたいという強い気持ちがあったのだと思います。

辰吉はのちにこう言っています。「人間は、自分の国、家族や知人がいるところでは、
甘えてしまう。自分一人だけで、たよる人もいないという厳しい場所に立って初めてわか
ることが多い」「ただ観光のために外国に行くのではなく、しっかりと目的を持ってその
国へ行き、その国の人から学ぶという気持ちがあればたくさんのことを学ぶことができる」

【注釈】

(注1) メリヤス手袋：伸び縮みしやすい生地で作られた手袋。

(注2) 親方：職人などが仕える主人。

棚次辰吉から学んだことを
まとめてみよう



てぶくろ君

自分がしたい仕事を考えてみよう。



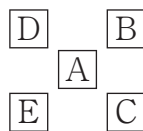
TEBUKURO-MAN てぶくろマン

編集・発行

○東かがわ市教育委員会 香川県東かがわ市湊1847-1
学校教育課 TEL 0879-26-1237
生涯学習課 TEL 0879-26-1238

○日本手袋工業組合 香川県東かがわ市湊1810-1
TEL 0879-25-3208
2023(令和5)年3月

表紙写真



A 棚次辰吉
B 昭和35年ごろの手袋
C 現在の縫製作業
D 大阪手袋株式会社縫製部の作業風景
E 手袋ブランド「香川手袋」